

▼2020年7月20日：今夜のEテレ「100分de名著」は吉本隆明の「共同幻想論」第3回

「100分de名著」は取上げられる内容により時折見ているが今回のテーマは録画してゆっくり視聴している。案内役の一人伊集院光のコメントでこの番組が分かり易い仕立てになっっているように思う。

当方の吉本の著書との出会いは1967年頃（たしか大学2年生となり米沢に下宿を始めた頃）の「吉本隆明詩集」が最初であった。何度も読み返しているため今では擦り切れそうになっている吉本隆明詩集（思想社）の中から、わたしにとつての吉本の原点と思っっている「恋唄」を以下に書き写す。

恋唄

理由もなくかなしかったとききみは愛することを知るので夕ぐれにきて夕ぐれに帰ってゆく人のために

きみは足枷となった運命をにくむのだ

その日のうちに

もし優しさが別の優しさにかわり明日のことが思いしられなかったら

きみは愛肉を信ずるのだ 恋はいつか

他人の血のなかで浅黄いろの屍衣のように安らかなになる
きみは炉辺で死にうるか

その人の肩から世界は膨大な黄昏となって見え

願いにみちた声から

落日はしたたりおちる

因みに、敬遠されがちの氏の著書では『吉本隆明「食」を語る 朝日文庫』は食をテーマとしてとつきやすいと思っうので紹介したい。

▼2020年6月22日：藤原正彦著「国家の品格」を久しぶりに再読中

大分前になるが拙コラム（アーカイブス…2013. 10. 26付け）の中で次のように氏の著書に触れたことがある。

*「真の国際人には外国語は関係ない」「国語、読書などによる総合力」と言い切った「国家の品格」の著者藤原正彦の言葉が重たい。

*因みに当方の経験を紹介する。

♪エンジニアリング企業入社間もない頃に会社での就業前の英会話教室で「日本の結婚式で女性が身にする『角隠し』と『綿帽子』の違いを知っていますか」と問われ誰一人答える

ことが出来なかった。

♪海外現場（たしかクウエート）でのたまのパーティで欧米などのエンジニアから日本の歌舞伎、文楽、狂言などについて問われて窮したことがある。日本語ですら語ることが難しいことを英語でなど出来ないのは明らか。

また、次のような短歌を詠んだことがある当方には氏の冊子（国家の品格）の最後の項「世界を救うのは日本人（*）」で記している論考に共感を覚える。

連鎖する世界のテロの終焉は神にフリーな国が鍵握る

*…次のように記しているので転記する。

日本は、金銭至上主義を何とも思わない野卑な国々とは、一線を画す必要があります。国家の品格をひたすら守ることで。経済的斜陽が一世紀ほど続こうと、孤高を保つべきだと思います。たかが経済なのです。大正末期から昭和の初めにかけて駐日フランス大使を務めた詩人のポール・クローデルは、大東亜戦争の帰趨のはっきりした昭和十八年に、パリでこう言いました。

「日本は貧しい。しかし高貴だ。世界でただ一つ、どうしても生き残って欲しい民族をあげるとしたら、それは日本人だ」

日本人一人一人が美しい情緒と形を身につけ、品格ある国家を保つことは、日本人として生まれた真の意味であり、人類への責務と思うのです。ここ四世紀間ほど世界を支配した欧米の教義は、ようやく破綻を見せ始めました。世界は途方に暮れています。時間はかかりますが、この世界を本格的に救えるのは、日本人しかいないと私は思うのです。

この考えは司馬遼太郎の「名こそ惜しけれ」という視点にも通じるように感じるのは当方の勝手であろうか？

▼2020年6月17日…「地上イージス計画停止」という地 方紙のトップ記事

6月16日の地方紙のトップは「地上イージス計画停止」。この記事の中で目に付いたのは「この計画の費用は維持運用費を含め約4500億円の見通しで、これまで調査費など約1800億円分が契約されている。」という記載。この日の社説もこれを受けて「完全に撤回し検証せよ」というタイトルの論説であったがこの中ではこの費用については一切触れられていない。また、論説の幾つかの指摘はもろろん

大切なことではあるが当方が気になったのは次のようなことであり地方紙と言えども論じて欲しい（当方の記憶の限りでは見ていない）と思ったこと。Webで調べれば一個人でも辿りつけるのかもしれないが税金を納めている一国民としてはメディアがそれらを調査して報道する責任があると思うのだが・・・。

・この米国との契約がどのようになっているか

・中止となった場合にはこれまで発生した費用に加えて発生するであろう違約金はどうか

・ことここに至った責任の究明

▼2020年6月10日：高齢多老化社会から「多死社会（または多死時代）」へ

これまでも当コラムや主宰する地域活動（One Coin 地域カカフェやFMラジオ番組）などで多老化社会の状況や問題などに触れてきたが今日初めて「多死社会（または多死時代）」というキーワードを目にした。多死社会（または他死時代）とは、高齢化社会の次に訪れるであろうと想定されている社会の形態であり、人口の大部分を占めている高齢者が

平均寿命などといった死亡する可能性の高い年齢に達すると共に死亡していき人口が減少していくであろうという時期とウィキペディアに書かれている。

このキーワードは本日の地方紙の連載コーナー「最後のときと向き合う 訪問診療医の15年」の最終回（12回）の中に見つけたので一部を転記紹介する。

・・・2025年に団塊世代全員が75歳以上の後期高齢者となり、日本は「多死時代を迎える」。今後、じっくり時間をかけて患者や家族に心を寄せる在宅みとりは困難になっていき、「死のオートメーション化」が進むと予測する・・・

この医師は40年にわたる外科医時代を経て、訪問診療を初めて15年、82歳の今も在宅医療の第一線で患者に向き合っているという小堀医師。次の言葉が心に残る。

・「死は『普遍的』という言葉が介入する余地のない世界である。」
・一つとして同じ死はない。なぜなら、一つとして同じ人生はないのだから。

▼2020年6月4日：9月入学は本当にグローバルスタンダードか？

コロナ禍の最中に急浮上した9月入学は見送りになったようだ。それはそれとして賛成派の国会議員、有識者たち更にはメディアが口を揃えているグローバルスタンダード（和製英語）は本当に世界標準（*）なのだろうか？

*…「国際標準」や「世界標準」の意味であれば、英語では「International standard」（インターナショナルスタンダード）と言うようだ。

因みに技術の分野ではISOが世界に通用することで良く知られていてISO9001（品質）やISO14001（環境）などは一般に知られている。

世界の小中高校の入学式が何月なのか調べてみたら次のような情報を見つけた（メディアもせめてこのような情報も示して報道をして欲しいものだ）。これを見る限り夫々の国の歴史や季節やその他の事情でまちまちであるように思われる。やはり、日本が現状（4月）になっている理由や経緯を含めそれぞれのメリットデメリットを証左を含めてしっかり検討することが大事と思う。

一部の人達の恣意的な発言に惑わされず、一番影響を被るのは常に「現場」ということを忘れずにいたいと思う。

1月…シンガポール、マレーシア、フィジー 2月…オーストラリア、ニュージーランド、ブラジル 3月…韓国、アルゼンチン、ペルー、チリ 4月…日本、インド、パキスタン、パナマ 5月…タイ 6月…フィリピン、ミャンマー 7月…インドネシア 8月…ドイツ、スイス、スウェーデン、デンマーク、ノルウェー、フィンランド、台湾 9月…アメリカ、イギリス、フランス、イタリア、ロシア、カナダ、中国、ベトナム 10月…エジプト、ナイジェリア、セネガル、カンボジア

▼2020年5月30日：専門家会議 政府、議事録作らず

記憶ではコロナ禍が始まった頃にも同様の掲載記事があったと思うが・・・これではそれ以降全く改善されていないことになる。首相官邸のWebサイトには第6回までの議事概要と資料は公開されているが、どのメンバーがどのような発言をしたかは分からないと記載されていた。つまり3月以来これまで開催された16回分の専門家会議の全ての議事録を作成していないという。

この政権は今回のコロナ禍を今後を活かすことを真剣に考えるつもりはないようだ。先に当コラム(2020年5月12日付け)で紹介した「危機管理は「儲ける」ためにすることではない。生き延びるためにすることである」、 「日本人は危機管理ができない」ということを与件として危機管理については考える必要がある」と語る内田樹氏の論考のように日本人の意識構造の典型としか言いようがない。

当方の身近な経験では大分前になるが山形県の男女共同参画審議会の委嘱で審議委員に2期4年間携わったことがある。その時でさえ事務局が作成した議事録案が送られてきて発言内容の修正を求めて反映されたことがある。「況や国の危機管理に関わる専門家会議をや」である。

▼2020年5月27日・5月26日の地方紙の片隅にある小記事【ニューヨーク共同】が気になった。

見出し… 歴史に記憶に刻む N.Y.タイムズ1面/コロナ死者1000人の名前



記事内容【ニューヨーク共同】(以下抜粋) …

・24日付けの1面に「米コロナ死者10万人に迫る 計りしれない損失」

・「彼らは単なるリストの上の名前ではない。彼らはわれわれだ・・・患者数だろうと、失業者数、数字だけでは新型コロナの影響を推し量ることはできない」

・死者それぞれに「厳しい仕事ぶりで知られる裁縫師」「30年以上にわたり数学と英語、歴史を教えた」など、人となりを紹介する説明を一言ずつ添えている。

この記事にふと本コラムのアーカイブスで紹介した「相模原殺傷事件 問われる社会の在り方」を思い出した。この時は「事件の犠牲者の氏名が公表されない」ことに対する5月25日掲載の最首 悟氏の論考を紹介して氏名公表の有り方に触れた。翻って我が国の今回のコロナ禍の報道で言えば感染確認者、死者数・・・その殆どが数字のみで扱われる現実があり、比較してこのN.Y.タイムズの記事は日本のメディアに対して一石を投じている。

▼2020年5月17日：新しい生活様式は新しいのだろうか？

かつて、「新しい判断」と言い約束を反故にしてもいいと公言した政治家がいた。また、この政治家の発言にはスピード感、しつかりと、着実に、あらゆる、大胆な、間髪をいれず、これまでにない、確実に・・・心に届きそうにもない言葉が並ぶ。

政治は言葉がすべてと誰かが言った。

14日に8都道府県以外の県の緊急事態宣言が解除され、それに先立つ5月4日に厚労省から「新しい生活様式」の要請とその具体例が出されこのところメディアを賑わすようになった。

技術の進化は止められないと思いつつ最近のAIを初めてする過ぎたる？自動化の礼賛は雇用を蝕み働くことの意味を改めて私たちに考え直すことを求めていると感じていた。

また、生活の利便さについても同様で弊持論「過ぎたる便利は不便利を生む」は言い過ぎかもしれないが私たちから生活の有りようを考える余裕を次第に奪っているのではないか

と思うようになっていた。そのような中で3・11の後に続いている地震、台風、豪雨などの自然災害に続いて今回の新型コロナウイルス禍である。拙い詠草ではあるが次のように詠んだことを思い出す。

天災に人災加わる3.11 人災に人災重なるCOVID-19

これまで慎ましく身の丈に合った生活で充分と勝手な考えでいた身には何をいまさら生活様式の変更？・・・という想いも募り、治療薬やワクチンができた暁にはまた元の生活様式に戻るのでは・・・とも思ったりしてしまう。そもそも20年前にUターンして以来、世界の流れの中心を占める経済成長戦略に疑問を持っていた。

約10年前の平成22年度2月に主宰する地域活動の集まり(One Coin 地域カフェ)で「成熟・縮小社会(又は低成長社会)」について参加者と話し合ったことを思い出す。

▼2020年5月12日：思想家 内田 樹氏の掲載記事に「腑に落ちた」 感覚を味わえた

5月9日の地方紙の「新型コロナと文明」という掲載コーナーに思想家内田 樹氏の投稿「最悪の想定嫌う日本 いず

れは国の命取りに」という見出しの投稿を読み、喉に魚の小骨が刺さったように最近気になっていたことが消え「腑に落ちる」感覚を久しぶりに味わうことができたので紹介したい。

内田氏は思想家、文芸評論家で武道家でもある論客として知られ、以前「街場の教育論」という著書を読んだことがあり当時教育現場にいた短歌の先達（弊師匠の一人）に紹介がてら話したことがある。今回の投稿は紙面の半分を占める内容でそのことから地方紙としても力を入れたことが窺える。

氏は「危機管理」という切り口に沿いながら日本人、日本社会の特性を分析しその克服の可能性について論じており次の当方の懸案事項にも答えを見つけていることができて得心するに十分な内容となっていた。

「世界が成熟社会（または低成長、減少社会）に向かうという論調が増える中で保守、革新または与党、野党を問わず日本の為政者が何故経済成長という錦の御旗にここまで固執するのか不思議に思えてこれまでも当コラムでも何度か話題にしてきたが得心に至っていない」

少し長くなるが記載内容のサブ見出しを紹介しながら氏の論点・論旨の一部を転記することお許し願いたい。

*序…

・危機管理というのは、「最も明るい見通し」から「最悪の事態」まで何種類かの未来について、それに対応するシナリオを用意しておくことである。どれかのシナリオが「当たる」とそれ以外のシナリオは「外れる」。そのための準備はすべて無駄になる。そういう「無駄」が嫌だという人は危機管理には向かない。

*生き延びるため…

・危機管理は「儲ける」ためにすることではない。生き延びるためにすることである。

・例えば感染症用の医療機器や病床は感染症が流行する時以外は使えない道がない。・・・「病床の稼働率を上げる。医療資源を無駄なく使え」とうるさく言い立てると（実際にそうしたわけだが）感染症用の資機材も病床も削減される。そして、いざパンデミックになると、ばたばたと人が死ぬ。

・そういう危機管理の基本がわかっていない人が日本では政策決定を行っている。

・先の戦争指導部がそうだった。・・・「希望的観測」だけで綴られた作戦を起案する参謀が重用され、「作戦が失敗した場合、被害を最小化するためにはどうしたらいいのか」というタイプの思考をする人間は嫌われた。

* 「言霊」を信じる・・・

・「言霊の幸(さき)はふ国」においては、言葉には現実変能力が有るとみなされている。祝言を発すれば吉事が起こり、不吉な言葉を発すれば凶事が起こると信じられている。

・それゆえ、日本では「プランAがダメだったら」という仮定は「凶事を招く」不吉なふるまいとして排斥される。そんな国で危機管理が出来るはずが無い。

・そういう国民性なのである。経済が低迷してきたら、五輪だ、万博だ、カジノだ、リニアだ、クールジャパンだともに憑かれたようにわめき散らしていたのは、主観的には「祝言」をなしていたのである。・・・あれは「祈り」なの

である。「言霊の力」で現実を変成しようとしていたのである。

・「日本人は危機管理ができない」ということを与件として危機管理については考える必要がある。

・今回の新型コロナウイルスによるパンデミックでも、日本人は「感染は日本では広がらないだろう」という疫学的に無根拠なことを信じ、広言していたが、それを「嘘をついた」といふべきでない。あれは「言霊」だったのである。「感染は広がらないだろう」と言えば、その通りことが起きると信じて、善意で言い続けていたのである。

* 同一のパターン・・・

・「東京五輪は予定通り開催される」も同じである。・・・「予定通り開催される」という祈りを、「開催しない」という決定が下るまで唱え続けるのが「日本流」なのである。

・同じ様に、感染拡大に備えて人工呼吸器や検査セットや病床を確保しなかったのは・・・「何の備えもする必要がなかった未来を」「予祝」によって招来しようとしていたのである。

・そうやって見直すと、今回のパンデミックにおける日本の失敗が同一のパターンを飽きずに繰り返していることがわかる。そろそろそのことに気づいてもいいのではないか。気付かなければ、同じことがこれからも繰り返されるし、いずれはそれがわが国の命取りになる。

▼2020年5月5日：10万人当たりの感染（確認）者数と死者数の報道

今朝の地方紙の新型コロナウイルスの感染（確認）者数の表の中に10万人当たりの感染（確認）者数と死者数の併記が初めて（と思う）なされていた。当方が弊コラムやFacebookでその必要性を指摘した4月24日から11日経過しているが、しかしまだ抜けているものがある。

一つ目は同じく3月16日に次のように指摘した母数としてのPCR検査数。

「母数（分母となる検査数）に対して発見された感染者数として評価されるべきであり単に感染者数の数だけに焦点をあてて語るべきではないと思う。」

二つ目は感染の広がり度を表わす陽性率。

表をみて判断する読者には関連する数値データを可能な限り表記する努力を期待したい。

また、緊急事態宣言が全国に拡大された4月16日からの「累積感染（確認）者数の増加率」が併記表示されていたがそれは何のための表記なのだろうか？

北海道、富山、鳥取、佐賀、鹿児島が100%、200%と断トツで飛びぬけている。対応力の差なのだろうか人々の外出自粛への協力度合いなのだろうか？

▼2020年5月5日：医療従事者用防護用具の不足が叫ばれて久しいが・・・

5日の朝のTVニュースでジャーニーズ事務所が医療従事者用防護用具の不足に対して8千万円の寄付をすると表明したところ多くの賛同者が出て3億3千万円となり、それらをJALの協力も得て入手できたので寄付すると発表する嵐のメンバー（相葉）が紹介されていた。

3. 11の時に学んだこと「誰もがそれぞれの立場で出来ることをすれば良い」の観点からすれば医療現場が助かる点で「いいね」を送りたい。売名行為として非難する向きもあ

ると聞くが・・・それは有名人（会社）ゆえでありメディアへの情報提供の仕方の問題なのかもしれない。また、一つの美談として済ませて良いのだろうか？と手放して喜べない複雑な気持ちにもなってしまう。

医療従事者用防護用具の不足が医療崩壊につながる要因の一つになると叫ばれて久しい。様々な方面での自作のフェースシールドや雨合羽の転用防護服などが製作されて供給されているというような報道も見聞きしながら外出自粛の高齢者はこのような民間の協力にも敬意もって見守っている。

それはそれとして、医療従事者用防護用具の不足がメディアを賑わすがそれに対処する為政者（国など）のアクション情報（何かはやっているのだろうか）がその実施内容やその結果（メディアなどあまり見聞きできないと感じるのは当方ひとりなのだろうか？もし対応策が取れないでいるならそれは何故なのだろうか？

民間人に出来て国が出来ないとすれば何か理由があるのであるのではとも思う。メディアにはその問題の原因を調べて上記の報道に併せて取上げて欲しいと思う。

▼2020年4月30日：コロナ禍でグローバル化と経済成長戦略のパラダイムは変わるのだろうか？

グローバル化が進む中米圏にトランプ大統領が誕生して以降に英国のECからの脱退やブラジルなど一部の国で自国第一主義が増え始めている。

この自国第一主義と経済成長一辺倒（至上主義？）の相関は不案内だが今回のコロナ禍により初動対策を誤ったと批判されるように今や感染確認者数が世界で最も多くなった米国のトランプ手法に陰りが見受けられる。

世界の資源の有限を見据えれば経済成長一辺倒の戦略に限界があり北欧の先進国の様な成熟・縮小社会（又は低成長社会）を前提とした政策の推進で、限られる資源を再生など有効活用ながら「慎ましく」進むしか道はないと思うのだが・・・日本をはじめとする世の為政者は経済成長という錦の御旗を降ろすことで自身の権力を失う恐怖から抜け出せないでいる。

グローバル化とそれを可能にした情報化技術の進化は止まらないし止められないだろうがこの度のコロナ禍はそれらの運用形態の変化を迫ることは間違いないと思う。

弊主宰の平成22年度第8回(2月) One Coin 地域力カフェス。ペシタルバージョン「やまがた地域力共創【論・楽(落)・会】」・・・成熟社会のいまだからこそ、私たちの新たな生き方・働き方を考えてみよう!!・・・において次の資料を準備して成熟社会について参加者と話し合っている。

* 110215 「論」の資料・・・成長戦略の呪縛からフリーになるために 【ローカルスタンダード】の可能性を語る車座会議

9年前に既に話題提供して話し合っているがその後の社会の変化に違いはあるが今回のコロナ禍により世界のパラダイム(社会の枠組みや構造)の変容も避けられないしそのスピードも速まると思う。

▼2020年4月27日 地方紙の記事 Ⅱ 解決の見通し語れ足りぬ物資と「説明」Ⅱ

4月26日の地方紙の共同通信編集委員の署名入り記事のコーナーでコロナ禍の現状分析と課題を的確に表現されていて「胸のつかえが下りた」感がある。

久しぶりに紹介(以下、抜粋&転記)をしたい。

・新型コロナウイルス感染症についての記事を、軍事や戦争のアナロジー(類似)で書くことはできるだけ避けてきた。・・・だが最近、別の意味で戦争を思い起こすニュースが増えた。人や物資の不足に關してである。この国に太平洋戦争下のような「欲しがりません勝つまでは」の時代が再来している。

・例えばマスクはどうだ。政府は、各戸に配ったたった2枚を大事に使い、なんなら手作りしろと言

う。・・・「ぜいたくは敵だ」らしい。・・・石油が枯渇し、松の根の油で戦闘機を飛ばそうとしたことを思い起こさせる。

・医療現場では飛沫を遮る防護具が足りず雨がっぱの提供を呼びかけた市長がいた。・・・家庭の鍋や釜からお寺の釣り鐘まで、金属製品を供出させたことと印象が重なる。・・・「ものづくり大國」という触れ込み、既に砂上の楼閣になっていた。・・・

・官房長官は2月、マスクについて「週1億枚以上供給できる見通し」と述べた。あれはその後、どうなったのか。・・・ドイツが検査キットの増産、備蓄を始めたのは1月である。

・見通しについてネガティブな情報も包み隠さず語り、その解決に当たる政策遂行の決意と見通しを語ること、それへの疑問、批判に一つ一つ答えていくことが、リスクコミュニケーションだ。

・公文書を改ざんしてまで政権を擁護するのが現下の官僚だ。・・・

・ウイルスは付度とは無縁だ。一強と評される長期政権であっても遠慮はせず、倒れるまで猛威を振うかもしれない。

▼2020年4月24日：PCR検査数は10万人当たりの検査数と比較し、その上で「陽性率」を考えたい

今日24日の地方紙に次のような二つの見出しの記事があった。

・「少ない検査数 識者が警鐘 「陽性率」 高く感染爆発見逃す恐れ」

・「東北6県のPCR検査状況（1/15〜4/21）」のグラフの掲載そして本県の陽性率3.9%

ちよっと遅くはないか？いまさら・・・の印象を持ってしまうのは当方だけのだろうか？

数値の表現はその母数を抜きに語るべきでないことは3月16日の弊コラムで触れた。また、新型コロナの場合は未発症者（無症状）がウイルス（生物ではなく何層もの脂質（脂肪）でできた保護膜に覆われたたんぱく質分子DNAである）を出すことは前に紹介した。

東北で検査数が一番の本県の陽性率は3.9%。検査数が最小（山形県の約1/7）の岩手県は感染者が0（当然陽性率も0）であるが検査数を増やせばその保証は無いと考えるべきと思う。

当山形県でも更に検査数を増やせば陽性率が変わるのは明らか。やはり、都道府県の検査体制・姿勢を表わす「人口10万人当たりのPCR検査数」も表示して他の都道府県の現状との比較で論じる必要性を強く感じる。

▼2020年4月15日：「方向性を持って検討する」の発言の意味

昨夕のかつて、否、今も「前向きに検討する」が話題になったことがあり「ほぼ検討しない」という意味であることが当たり前になって久しい。15日のTV報道を見て違和感を覚えたのは私だけだろうか？

NHKも民間も、新聞各社もただその言葉を伝えたただけで政治家の発言の曖昧さ、責任の所在の無さを指摘する論評は調べた限り見つからなかった。

政治家は発する言葉に政治生命がかかっている位に大事というような考えを提示した識者がいたがこの識者からすれば言葉として論ずるに値しないということで論評が無いのだからと当方には思える。

14日にこのコラムで公式ツイッターの炎上について触れたがこの発言の仕方はこの国のトップがOut of Controlの状態になって示していることを示しているように思えてならない。

▼2020年4月14日：安倍首相の公式ツイッターの炎上

昨夕のTV報道で芸能人の自宅で身体を動かそうという歌の呼びかけ映像にツイートして愛犬？と紅茶で寛ぐ姿と「自宅待機をしよう」というメッセージの映像が紹介された。これを見て啞然として開いた口が塞がらなかった。

今、国の緊急事態宣言やそれを受けて奔走する都道府県の対応やそれらの影響で様々な場所で苦しみ、苦勞している国

民の意識を逆なでする危機意識ゼロを露呈する公式ツイッター！

さすがに取り巻きには止める人間がいなかったようで菅官房長官の「35万回の「いいね」が得られている」という会見を見せられて、権力と税金により収入を保障されている国のトップがこのような公式のツイッターを発信するようではこの政権は既にレームダックの段階になっていると感じた。

大分以前のコラム(2016年)「どんな世界を夢見るか ウルグアイ前大統領ムヒカ氏来日、幸福論展開」の記事について(一)を思い出した。

ウルグアイ前大統領ムヒカ氏が来日し幸福について語ったことを。たしか、自身の財産は古い車一台と話していた。詳細は忘れていたが早稲田？大学での講演も強く印象に残っている。時代のスピードは速いとは言え氏の一贯した思考に共感を覚え今のこの国の為政者たちにムヒカ氏の姿勢を思いだして欲しいと強く思う。当方の知る限りでは昨夕のそして今朝のNHKのTV報道ではこの件を一切取上げていなかったことを付け加えたい。

▼2020年4月6日：緊急事態宣言について

昼のTV番組やWebNewsなどで首相は6日、新型コロナウイルスの感染拡大を受け、緊急事態宣言を発令する意向を固めたという次のような内容の報道がなされている。

政府は同日午後2時から「基本的対処方針等諮問委員会」を非公式に、午後6時すぎから新型コロナウイルス感染症対策本部をそれぞれ聞き準備に着手するようだ。対象は東京都など首都圏や大阪府などを軸に検討し、7日にも発令する。何処を対象とするか・・・素人なりに「発生感染者数vs人口」という切り口を考えてみたが如何だろうか？

数値を扱う際の基準としてしばしば母数が用いられる。感染者数が毎日のように示され更新され発表されるが検査数（母数）に対する数値として扱われることが少ないのが気になっていた。

因みに「発生感染者数（人）vs人口（万人）」で計算してみると次のようになる。緊急事態宣言の対象を決定する要素は様々あると思うがこの切り口も一つの指標になると思っただ次第。
主だったところと南東北3県の数値を大きい順に並べてみる。

東京都…1033÷1395||0.74 大阪府…408÷882||0.46 千葉県…261÷628||0.42
兵庫県…203÷547||0.37

愛知県…227÷755||0.3 神奈川県…264÷906||0.29 埼玉県…184÷734||0.25 山形県…13÷108||0.12 宮城県…23÷231||0.1 福島県…16÷185||0.09

▼2020年3月31日：“脚本の台詞の間合いに仕組まれて
際立つ沈黙饒舌凌ぐ”

首題の弊詠草は3月30日付け「やましん歌壇」の井上管子選に掲載された一首です。

かつてこのコラムに「TVドラマから見る脚本家二人の違いはどこにあるか」というタイトルで下記のような内容をアップした。その考えを短歌に詠んでみたらどのようなか・・・選者（歌人）の評価に耐えられるか・・・と試みとして一首詠んだわけだが掲載に至り何とかクリアできたようだ。

最近のTVドラマで次の二人のドラマを見る機会があった。

・山田太一の「よその歌わたしの唄」
・橋田寿賀子の「なるようになるさ」

二人の脚本家の違いは

「何を表現するか、どのような問題提起をしているか」「見る側にどれだけ考えさせるか」に尽きるところ。脚本家は手段としてのシナリオで表現する。

山田は作家でもあり、その作品に関心を持ってきたのでシナリオの作品も知っている。例えば、「早春スケッチブック」、「今朝の秋」などを読むと分かることだが、

・会話が長くない
・会話と会話の間に「絶妙、微妙」とも言える【間】が設けられている

・ト書きからも脚本家の作品に対する考えや演技者への要望が読み取れる

シナリオ作品の読み手はそしてドラマになれば視聴者は必然的に「考えさせられる」ことになる。

一方、橋田の作品はしばしば出演したタレントや俳優の笑い話として「台詞が長くて苦勞する」などと紹介される。今回の「なるようになるさ」はこれまでの作品の手法と変わり映えしない（脚本家の考えをこの延々と続く台詞で語っている）ことが分かる。視聴者も考える暇もなく番組の流れに身を任せることになりストーリーの先が見えてしまいい、場面展開の面白みなどもあまり期待できない。「過ぎたるは猶（なお）及ばざるが如し」の好例ではないかと思える。

今朝のNHKTVあさイチでスマホ5Gを取上げていた。

専門家も参加して番組が高速大容量・超低遅延・多数接続を売りにした時代の到来！とそのメリットの紹介ばかりだなくと思っていいたら視聴者からのメールのコメントで「メリットばかりでなくデメリットも！」が紹介された。

専門家に振られこの専門家は若干嫌な顔？をしながら「電磁波の健康への影響などの指摘もあり以前から話題になっているが問題は無いと思う」と答えており何んどのを得ない回答！ではないかと感じた。

確にかかつて携帯やIHの始めた頃に話題になったと記憶しているがその後はその普及が進み当たり前になっていくにつれ殆ど取上げられなくなった。

コメントした人はそのような答えを期待したのでは無く例えれば5Gの普及の中で懸念される運用に潜むリスクなどを取上げて欲しかったのではないかと推察した。

例えば素人の当方でも次のようになりスクなどを思いつくが・・・。

1. セキュリティ

2. 個人情報情報の国家管理（中国の例）

未だガラ携ユーザーの連れ合いに本当にこのような物（システム）の必要は有るのだろうか？と問われ、技術の進化は止められないのでそれを使う側のしくみ（制度、運用）の問題を論じる必要があると答えた。

別の言い方をすると「過ぎたる便利さは不便さを伴う」ことを肝に銘じるべきと言える。

AIなどですることが少なくなったら人は一体何に生きがいを持って生きるのか・・・。

▼2020年3月28日：外出自粛の報道関連に温度差

27日夕方の民放TVの国会予算委員会の映像で安倍明恵首相夫人の観桜の写真がSNSで炎上していると取上げられ、安倍首相の苦々しい貌の答弁様様が映っていた。

NHKの関連ニュースではどうかと見ていたが今日までに放映されてはいないように思えたので“なるほど”という感想を持ったが念のためWEB調査したらNHKのNEWS WEBでは取上げられていた。また、当方が読んでいる地方紙には28日に小さく取上げられていた。

これに限らずこれまでも数々の話題を提供している懲りない夫人なので今更言うべくもないが・・・夫婦間での共通認識がなされていない典型という観点で自らの心に留めたいと思った。

少なくとも騒動が始まった直後から当コラムで今回のウイルスの感染がこれまでの例と大きく異なるといふ技術的情報を基に、杞憂であって欲しいと願いつつ感染拡大の可能性を指摘して自らもそれなりの自粛をしてきたつもりだが・・・世界の感染拡大（パンデミック）の様相が日本にも及びそうな気配を感じる。

▼2020年3月19日：COVID-19感染者数の評価（真偽）を思っ

かつてこのコラムで何度か数値の評価に関連して次のような事案を書いた。

「NHK」報道への反応「食品の放射線汚染のサンプリング手法」／再び数字の扱いについて（福島原発による子供の甲状腺がん調査）／海外派遣自衛官の自殺54人の記事と数値の扱いについて

その内容は拙著及びそのデジタルブック「続 私的アンソロジー」＃しあわせの構図」を参照されたい。

単に理工系の発想の性と言いきれない問題が潜んでいると思われ首件の報道を見て感じることを記す。

COVID-19については5度ほど当コラムで触れており今回で6度目となるが現時点で山形県は感染者が発見されていない7県の一つとなっている。

そもそも感染者数はその検査実施数と併せて発表され、評価されるべきと思う。つまり母数（分母となる検査数）に対して発見された感染者数として評価されるべきであり単に感染者数の数のみに焦点をあてて語るべきではないと思う。

山形県も検査数が増やせば（昨日で百数十件との報道）感染者がいらないとは言いい切れず感染者数がいらないと安心してはいられない。

先日のTV報道で確か和歌山県は国（厚労省）の検査に対する指針？基づかないで独自の判断で検査指針と実施体制で行う（検査数を増やす）と表明していた。また、以前首相の独断で小中高の休校措置の要請があった際に島根県知事は感染者が出た時点で実施すると表明したことを思いだした（島根県も感染者が発見されていない7県の一つ）。

何れも根拠が乏しい国（厚労省）の要請に異を唱えた貴重なアクションだと考えたい。

▼2020年3月13日：感染防止にイニシアティブを取れなかったWHOが漸くパンデミックと発表

COVID-19関連の情報が始まった2月の10日前後に素人なりに今回の新型コロナウイルスとこれまでのウイルスとの主な違いを次のようにピックアップして情報交換する知人に伝えながら2月20日には本日（3月13日）に開催を予定した主宰する地域活動の反省会、意見交換会@飲食店の中止を決めた。

①感染者は発症前（感染に気付いていない）にもウイルスを出す

②検査薬、検査体制、治療方法が確立されておらず感染者発見に時間を要する

③武漢が封鎖をする以前にも既にも多くの中国人、外国人や日本人が日本国内に入っている。

その間、メディアアの映像（チャーター便、ダイヤモンド・プリンセス号、屋形船、その他）での検疫官の防護服の様子、船内での検疫、検査作業、また感染者受入れの旅館や病院などでの状況・情報を見ていて防止技術のプロトコルが徹底されていない様に思えてこれでは感染が広がると懸念していた。

かつて勤務した企業で医薬品製造の工場や設備の設計・建設に携わったことがあり、原薬（取扱い量の桁が違うのでかなりの危険物）封じ込める「バイオ&ケミカルハザード防止技術」については一般の方よりは知見を保有しているつもりです。

その後の和歌山、沖縄、北海道・・・各地で感染の情報（院内感染も含む）を見ながら遅かれ早かれ山形にも・・・と思っていた。また、素人が入手できた情報では発生源中国が国家の威信を賭け権力を行使して封じ込め作業を進めたこと（具体的な作業の是非は別にして）や台湾などの対応、対策から日本をはじめ多くの国々が学ばなかったように思える。

更に約1カ月が過ぎ後ろ向きとも思えたWHOが漸く「パンデミック（世界的大流行）」を表明した。この間WHOが機能不全に陥っていてそれを避けるための「イニシアティブ」は殆ど取らなかったように見受けられるが・・・ここに至ってしまったえばその「封じ込め」の視点からは時すでに遅しと言え先が見通せない状況。

高齢者はひたすら普通のインフルエンザとの違い（上述COVID19の3つの特徴）を肝に銘じて冷静な行動&自衛をするしかない。

▼2020年2月26日：続・退廃する政治家（COVID-19で揺れる状況の中で）

11月24日にも「退廃する政治家・官僚」を記したがCOVID19で揺れる現在でも変わりなくむしろ際立っている。一例を挙げれば・・・

・新型コロナウイルス感染症対策本部会議（全閣僚がメンバー）に小泉環境相、羽生田文科相、森法相が地元後援会へのパーティー出席などで欠席。

・後手後手の対応を挽回すべく26日に「イベント自粛要請」、27日に「中高臨時休校要請」と専門家会議の協議の

先に行く決断を装うようなアクションの中で秋葉首相補佐官（衆院議宮城選出）が26日夜に出版記念パーティーを開催したとTVニュースや新聞で報じられた。

27日夜、首相官邸で記者団から秋葉氏の立食パーティー開催についての見解を問われ、「ご苦勞様」とだけ語った。当事者も、その責任の所在を指摘された国のトップの発言を待つまでも無く政権のガバナンスが完全に崩れており自浄作用など望むべくもない。

▼2020年2月24日：その後のCOVID-19感染の状況に思う

2月14日のコラムで「中国の失敗策から学べなかつた日本のCOVID-19」を記しているがそれから10日が経過し、初動のつまずきのリカバリー対策は後手後手となり影響が広がりつつある。

特に問題なのは22日の夜に厚労省大臣のグイヤモンド・プリンセス号からの下船者の中に感染の有無の検査が未実施の人がいたという発表には啞然としてしまった。

更に、船内で業務にあたっていた厚労省職員41人にウイルス検査を行うと発表した。このうちの1

部は、船内業務後に検査を受けなのまま、元の職場に出動していたという。なんという怠慢、危機意識の欠如だろうか！！

検査、防疫に関するプロトコル（基準の手順書）が無いのか、否、不十分でもあるはず、あるいは充分としてもそれを順守する意識が欠落していたのか・・・論外と言える現実を見聞きして国家公務員の危機意識に啞然としてしまう。

検査、防疫に関するプロトコル（基準の手順書）が無いのか、否、不十分でもあるはず、あるいは充分としてもそれを順守する意識が欠落していたのか・・・論外と言える現実を見聞きして国家公務員の危機意識に啞然としてしまう。

東北や当方が住まう山形での感染者報道がまだ無いが何れは（時間の問題）と覚悟する必要があると思う。

▼2020年2月16日：COVID-19の地域活動への影響

新型コロナウイルスの報道がメディアを賑わし始めた。

3月13日に予定して会場を押さえていた「One Coin地域力カフェ」の反省会兼意見交換会の実施をどうするかコンソメンバーへメール配信で次のように相談をした(2月19日)。

このところのCOVID19報道に小心者の高齢者は行動先にも配慮しなければという感じを持ちつつあります
が・・・お二人はどのような感想をお持ちですか？

まだ報道に挙がらない東北の地でも既に潜在感染者がいて
もおかしくない(間違いなくいる)状況にあると思います。

ご承知のようにポイントは

・ 検査薬、検査体制が十分に確立されておらず感染者発見が難しい

・ 感染者は発症前にもウイルスを出す

・ 武漢が封鎖をする以前にも多くの中国人、外国人や日本人が日本に入っている

当方はかつて勤務した日揮で医薬品製造の、工場や設備の設計・工事に関わったことがあり、原薬(扱う量が違うので危険物)封じ込め技術(ケミカル・バイオハザード防止技術)については一般人よりは知識を持っていると思っています。

メディアの映像で検疫官の防護服の様子や船内での検疫、

検査作業を見ていてそのプロトコル(基準の手順書)が徹底されていない様に見えこれでは感染が広がると懸念してしました。

その後和歌山、沖縄・・・各地で感染の情報(院内感染も含む)を見ながら遅かれ早かれ山形にも・・

・ と思っていました。

昨日の知事会見のニュースでは県内でも数人の感染検査を実施し、陰性だったという報道がありました。

3. 11の時の原子炉のメルトダウンと同じで専門家やメディアもある程度コントロールされているということ念頭に状況を見守る必要があるのかも知れませんね。

追記・メールでの協議の結果翌日(2月20日)見送ることになった。

▼2020年2月14日:中国の失敗策から学べなかった日本のCOVID19対策

新型コロナウイルス感染騒動に関してWHOも機能していないように慣れない関西弁風に言えば「何を今更・・・命

名 (COVID-19) してどうするんや、他にやることは無い
いんか!」と言いたい最近の状況と言える。

メディアを賑わすニュースはこの国のリスクマネジメント
ト力の無さを露呈しているように思える。しばしば刑事もの
ドラマで見聞きするシーンで例えれば「初動捜査の誤り」に
当たるのかもしれない。

簡単な(汎用)検査方法、その治療方法がまだ見つからな
いこの感染症対策も同じように思えてならない。

水際対策に固執するあまりまた経済への影響を重視するあ
まりなのだろう最初から大胆な対策を躊躇してきたこれまで
の対処療法的対策の結果、昨日には「発症していない(＊)
感染者が国内に数百人のレベルで存在する」という考えが専
門家やメディアの見立て(3.11の時の例もあるのであま
り過信はできないが)が報じられていた。

＊このウイルスは発症していなくても感染者はウイルス
を排出する(これまでのSARSのようなウイルスと異なる)
と専門家が警鐘

当方をはじめ高齢者はますます外へ出る機会を失いつつあ
る・・・。

▼2020年2月9日:地方紙に「肺炎よりインフル脅威 米
死者1万2千人か」の記事

地方紙の「新型コロナウイルス」関連記事掲載ページの
片隅に小さく首件の見出しで初めて掲載された(全国紙では
8日の産経)。

Webサイトの情報では2月6日にこの内容が報じられて
いて何故日本のメディアはこれを取上げないのかと疑問を呈
していた。

記事では「米疾病対策センター(CDC)によると米国では
インフルエンザが猛威を振っており、CDCは全米でこの冬
に少なくとも2,200万人が感染し、1万2千人が死亡し
たと推計している」と記されている。

米国のインフルエンザは中国の新型コロナとその規模は比
べるべくもない。

インフルエンザは既に検査・治療方法が確立しているから取
上げないのか・・・3.11の時にメルトダウンを報じなか
った際と同じように政府のコントロール(?)なのか・・・
米国政権へ配慮する政府に付托しているのか・・・。

▼2020年2月9日：地方紙の地方紙の「談話室」に思う

欧州連合（EU）から英国の離脱協定承認を前に欧州委員長が述べた言葉を紹介していた。その言葉「別れの苦しさの中でのみ、われわれは愛の深さを見つめるのだ」は19世紀の作家ジョージ・エリオットの言葉を取り込んでいるとのこと。

英国の政治家が「われわれはEUが嫌いなのだ」という方言に対してその懐の深さは際立っていると紹介している。また、「知者惑わず、仁者は憂えず、勇者は懼れず」とかつて退陣する際に論語から引用して述べた宮沢喜一元首相の言葉にも触れている。

そして、翻って今般の国会の質疑での与党側（安倍首相）の答弁は含蓄どころか論戦以前の様相と危ぶむ。当方の好きな言葉（司馬遼太郎がその著書で述べている）「名こそ惜しけれ」の気概を持った政治家の出現が本場に望まれる。

▼2020年2月1日：NHKスペシャル「認知症の第一人者が認知症になった」を見た

録画したこの番組を見る機会があり妙に得心する箇所があったので下記したい。

第一人者と言われるこの方は「長谷川式」と呼ばれる早期診断の検査指標を開発、「痴呆」という呼称を「認知症」に変えるなど、人生を認知症医療に捧げてきた医師。

かつての先輩医師の言葉「君自身が認知症になって初めて君の研究は完成する」を胸に、自ら認知症であるという重い事実を公表したと紹介されていた。

「完成した研究は自身では活かすことができないが後に続く後輩たちに引き継がれる」ということと理解した。

この医師（長谷川先生）は研究時代に介護する家族の負担軽減のため「認知症患者のデイサービス利用」を提唱したとあり、自身も認知症になって本意ではなかった？ようだが娘さん、奥さんの勧めや二人の負担を考えデイサービスにトライした場面が紹介されていた。通所者と一緒になってゲーム（輪投げ？）をする（させられる）シーンとそこで身の置き所が無い表情をしている氏が映され、確か2、3日で中断した映像となっていた。

当方の推察では氏がかつて提唱した時のデイサービスの中味と現在の施設のサービスマスに違いが生じているか、或いは提

唱した当初から患者への視点が欠如していたことを暗に語っていたように思う。

認知症であろうとなかろうとしばしば施設のメニューやその紹介などで入所者みんなでの歌とか運動とか遊びをしているシーンを見る機会が多く、どうもやらされている感が強く・・・私は勘弁して欲しいといつも感じていた。

入所者の個々の希望に沿うようなサービスは施設運営の観点からは難しいのかもしれない。そのようなきめの細かいサービスを提供する施設の紹介をしている番組を見る機会もあり一度Web検索で調べたことがあるがその費用は当方など一般人からは手が届かないレベルのようだ。

6回目の年男でもある当方は幸いにもまだ介護施設などのお世話にならなくて済んでいるが、しばしば町内会で老人クラブや百歳体操などのお誘いを受ける。自身がやりたいことであるなら別として自身でやっている地域活動などで手いっぱいなので幸いにもこれらの勧誘を受ける機会は今のところない。

誰にも訪れる可能性があるが・・・できれば通り過ぎて欲しいものだ。

▼2020年1月5日：写真短歌等の「コラボ作品づくり」について

今日（1月5日）のNHKETVの日曜美術館でファッションデザイナー・皆川明氏を取上げていた。もちろん初めて知るデザイナーで作品を見るのも初めて。

番組では次の様に紹介されていた

「ファストファッション全盛の今、流行にとらわれない独自の生地作りで注目されるデザイナー・皆川明。若い頃は長距離選手として活躍、魚市場でも働いた異色の経歴を持つ皆川は、服、絵画、さらには人生100年時代の幸せな生き方そのもののデザインを目指す。キャリア25周年を記念した大規模な展覧会から、異色のデザイナーの頭の中に迫る！」

特に共感を覚えたのは詩人谷川俊太郎とのコラボ絵本「はいくまないきもの」の紹介箇所で、皆川氏のデザインに谷川氏が詩？を付けた作品。昔風に言えば共同制作作品、今風に言えばコラボ作品。

当方が平成22年から短歌を嗜むようになって始めた「写真短歌」は「独りコラボ」と言える作品づくり。

短歌の世界でも俵万智が他人（プロ）の写真に短歌を添えた作品などの冊子を出してはいるが・・・自分の写真に自身の短歌を添えた写真短歌はあまり見かけない。

昨年11月にリニューアルした弊HPで「写真短歌」コーナーや、「写真短歌・写真俳句・その他投稿」コーナーに掲載している作品もその質を問わないとしてETVの番組で紹介した皆川氏×谷川氏のアクティビティと同じ領域と得心した。

▼2019年12月25日：「出生数 初の90万人割れ」という記事

地方紙の今日の1面、4面に記された次のような見出し&記事に「何を今更」という思いを強くした。

1面…出生数 初の初の90万人割れ 19年推計 人口自然減は最大・4面…背景に「非正規」増 改善へ雇用安定不可欠

本件やその関連事項については2017年6月に開始した当コラムでも何度か取上げており（13回/5年）見出しのみ挙げると次のようになる。

縮小社会と人口減少／子供の日の新聞記事「少子化歯止めかららず」に思うこと／「正社員の助成金増 継続」という記事は何かおかしくは無いか？／少子化への奇策inロシア／国がひとり親家庭と不妊治療を支援すると言うが・・・
／首相ら発起人「子供の未来応援基金」寄付低調 まだ300万円！！／「潜在待機児童60万人」の意味／潜在待機児童6万人という続けているの記事について／新聞記事「離職ゼロ」鍵は職場に、介護休業制度見直し、余力ない中小、意識も問題／「待機児童ゼロの真実」という記事／「待機児童定義見直し」に思う／待機児童2年連続増／地方紙記事「待機児童ゼロ目標断念」から読み取れること

施策を色々打ってもその場限りという感が否めない。

原因とその関係性をクリアにしそれら原因を究明してそれらの解決策への対処なくして命題「出生率の向上」は望めな
いと思う。

検討の甘さや誤解を恐れずに端折って言えば・・・

「若者の生活（就業）の安定↓結婚↓子供を持てる社会環境（例えば共働きができる社会環境）の整備↓出生率のアップ」ということだろうか・・・。

▼2019年11月25日：「桜を見る会」に関する新聞報道

12月4日のコラムに「退廃する為政者と官僚」というタイトルで投稿したがその後のこの件についてのTV、新聞などの報道を見てみると余りにも情けない内容でコメントをする気にもなれなかった。

が、しかし12月5日の地方紙に「破棄答弁時 データ残存」を官房長官が認めたという記事と「廃棄したのは障害者雇用の職員」と首相が国会で答弁したという記事には情けなさを通り越して呆れ果ててしまった。

責任を取ろうとしない政治家（政治屋？）とそれを支え続ける官僚にこの国の先行きはどうなるのかと暗澹たる思いになる。

国民のひとりひとりが政治的信条（与党or野党）は別にして道義的、倫理的観点から「それはおかしいだろう」と思えない、言えないとしたらそれこそ何かおかしいのではないだろうかと思ってしまう。

法制度が違うとはいえ（当方は全くの素人）隣国のように検察が入ったり、米国のように弾劾するような形にならない限り、弱者に責任転嫁をして（言い訳をして）居直っているようなこの国の為政者は無くならないのかも知れない。来た

れ！」「名こそ惜しけれ」の精神、倫理観を持った「気骨ある政治家」

▼2019年11月25日：地方紙の記事（佐伯啓思「英会話より国語力」）で思うこと

最近のメディアで大学入試改革の一環で英語の民間検定が問題になっておりそのことに対する識者（京大名誉教授）の意見が載っていた。そもそも小学校への英語、英会話の授業導入ということは大分前から取上げられていて多くの識者が反対しており当方の経験を踏まえても同様に反対（当方の言葉で言えば「英語より国語の“充実”」である）。

「日本語で物事をまともに考えられない人間が英語で語れるはずがない」というのが持論です。

その根拠は当方の次のような経験から生まれている。当方が企業で働き始めた頃、就業時間前の企業内英会話で記憶に強く残っていることがある。外国人の先生から結婚式で女性が使用する「角かくし」と「綿帽子」の違いを問われ誰も応えることができなかった。そもそも日本語で考えても知らなかったことが理由。

ことほど左様に、歌舞伎、文楽・・・日本文化の大半の

内容について日本語でも語れないのが現実だった（今もあまり変わりがないが・・・）。

その後、海外の建設現場を幾つか経験する中、外国人を中心に時折開催されるパーティーでは仕事以外の話題は求められておらず話題に窮した経験が幾度もあった。

識者の例を挙げれば・・・藤原正彦の著書「国家の品格」の第6章なぜ「情緒と形が大事なのか」の③「国際人を育てる」で次のような項目で日本人の英語が触れられている。

「日本人の英語下手の理由」「外国語は関係ない」「外国語より読書を」

詳細は省くが氏の他の著書「日本人の矜持」などでも本テーマについて触れられている。次のように紹介されている著書なので参考にされたい。

「国家は将来ある子供たちの芽を摘もうとしている。英語早期教育、薄い国語教科書、愚かな平等教育、歪んだ個性の尊重・・・。真に身につけるべきは、読書による国語力、基礎の反復訓練による我慢力、儂いものの美を感得する感受性、歌う心、卑怯を憎む心。そして、大人たちは、カネと論

理を妄信するアメリカ化を避けねばならない。碩学賢者九名が我らが藤原先生と縦横無尽に語り合う。〜

▼2019年11月24日：退廃する為政者と官僚

桜を見る会の一連の報道を見て「為政者と官僚の退廃ぶり」に改めて「名こそ惜しけれ」への想いを強くした。参加者名簿の廃棄とその後に実施したとされる廃棄基準の変更はその「極み」と言える。

大西証史内閣審議官の発言「明恵夫人の推薦があった」旨の国会での発言のTV映像が唯一の救いか？

・・・官僚にも骨のある人も残っている！！・・・

▼2019年11月17日：東京五輪のマラソン・競歩会場変更の報道に見るメディアの怠慢

一連のゴタゴタの報道で一番気になったのがメディアの対応。振返ると「IOCが開催地を変更」という報道がなされて（10月16日）以降しばらくはどのTV局もこの決定に右往左往する関係者の報道だったという記憶があり噛み合わないIOCと東京都知事の考えが流されていた。

が、しばらくしてT.V局が「会場の決定権は五輪憲章でIOCが保有」と報じた。何だそうなのか・・・と当方も含め一般視聴者は思う。関係者やメディアであればIOCが何故一方的に札幌開催を発表できるのか調べれば分かったはず。分かっているのに報じなかった或は五輪憲章を調べもせず引張り続けたように見える怠慢は視聴者を弄んでいると思えない。

そして「合意なき決定（11月1日）」までの約2週間、様々な水面下での駆け引きがなされたことは間違いない。

もう一つ気になるのはこの問題でのJOCの無力・無策ぶりと言える（かつての政財会の重鎮を擁しながら、いや、それゆえなのか）。一方のラグビーワールドカップの盛り上がりと成果と比較すべくもないが・・・何とも情けない組織と言える。因みにゴタゴタの途中で当方が考えた問題解決の妙策は・・・札幌市の思惑（30年冬季五輪招致）を度外視した上で・・・「札幌市が『今からでは無理です』と辞退すること」でした。

▼2019年10月19日：地方紙の記事掲載の規準（社説と小さい囲み記事）

今日の社説のテーマは「プロ野球ドラフト指名 県勢3人の活躍に期待」。一方、「囲み記事」のテーマは「軽減税率のコスト」。

スポーツに関心が強い読者にとってはドラフトも気になるだろうがドラフトに関する記事はスポーツ面で結構紙面をさいておりそのページの「解説」でも充分のように当方は思うが・・・如何なものか。

10月以降消費税が10%になったことは仮に良しとしても公明党の強い要望で自民党を押し切ったとも言われる1年間という期間限定のこの軽減税率の施策には関係者（行政、小売業者、消費者など）がどれだけ振り回されているかメディアの報道を待つまでもない。

囲み記事に書かれている内容（軽減税率のコスト）の方こそ社説で扱うべきではないのかと二つの記事を同じ日に読んだと感じた。

もし、別の日の社説に囲み記事で書いている内容を既に論じていたなら当方の意見は的を得ていないと認めざるを得ないが・・・これまでも何度かこの囲み記事コーナーについてコラムでも取上げてきたがどうも社説など大きなコーナーでは書けないこと（地方紙の本音）をこのコーナーで書いているのではと感じるのは当方のへそ曲りの感想なのだろうか？

▼2019年10月19日：大石田町議選 定数割れ

サブ見出しは「3回連続無投票も現実味」「なり手不足に対策求める声」。このコラムで地方議会議員選挙、議員のなり手不足という話題に触れるのは何回目になるのか・・・。

地方紙の2面のトップ記事ということもあり再度取上げる。当方が3度も取上げたように関係する情報は充分に有るはずであり地方紙と言えども問題と原因の究明、課題の抽出、メディアとして考える解決の方向性を提起できないのが残念。

記憶を辿れば最初に取上げたのは「20120903 TV番組「アカルイミライ」で知った町議員のあり方」。その後は「20140805 地方議員、議会のしくみについて思うこと」、
「20160906 直言(地方紙のコラム記事)」と3度取上げた。3度目に論点をまとめているので再録(以下)する。

「今、必要な叩き上げ派首相」というタイトルでの直言だが、サブタイトルの「弱者の生活 実感できぬ 世襲派」の方に関心を持った。国のトップや国会議員、地方の首長などは対象にはできないと思うが、地方議会、特に市町村レベルの議員は「生業」としない「しくみ」が必要ではないだろうか？このレベルでも生業とするから世襲が無くならないと言える。
20160618日の地方紙の論説・解説へのコメントでも述べた

ようにボランティアの考え方を取り入れられない限り根本的解決には程遠いと思う(事例を下記に再録)。

当方のような一個人でも気付けるような気付きだがメディアであれば国内外の事例などの調査も十分可能と言えないか。

＊南木曾町議員の例(平成22年の情報)

- ・町議員の大半が「専業・生業」では無いこと。
- ・選挙に必要な供託金(一定の得票数に満たないと没収される)が不要ということ。
- ・町議会では、本会議約10日・委員会や町の行事へ出席を加えても年間約60日で、議員の報酬は月額14.3万円。全議員が他の本業(番組で取上げた議員(議長)はタクシー運転手)で生計を立てている。
- ・議員の殆どが担当プロジェクトを持ってその実現に注力している
- ・定員割れが生じている

・若者・中堅のU・Iターンに呼びかけている 日本の町村議員あたりから変革が必要なのかもしれません。

＊海外の議員の例

・住民自治の考えが長年浸透してきたスイスでは住民の代表者が生業とは別に議員として夜間に議会に通う

・イギリス、フランス、スウェーデンなどでは地方議員は原則無給

▼2019年10月7日：わが師逝く

私の短歌の師であり短歌結社「黄雞」の運営委員長の阿部京子先生が10月5日に他界された。

先生は2014年に齋藤茂吉文化賞を受賞されておられやましん歌壇の選者を長年（08〜19年）務められている。

5年前のやましん歌壇への投稿がご縁でこれまでご指導をいただき黄雞（&山形支部）への入会するきっかけもいただいた。また、弊冊子「続 私的アンソロジー」しあわせの構図」の“発刊に寄せて”にも一文を頂戴している。

これからの私の短歌の歩みの標（錫杖）を亡くしたような喪失感が大きい。翌日に次のように詠んだ。

我もまた何れは果つる命なり

先逝くわが師を遠地で想う 合掌

▼2019年3月22日：『写真短歌常設コーナー開設@山形市立図書館』の地方紙記事掲載

先のコラムで紹介した当該展示については懇意の地方紙記者に取材を受けていたが嬉しいことに当方の誕生日の日に記事掲載となった。

自身の姿入りの記事は久しぶり。Uターン以降行政からの委託事業や地域活動などを取上げてもらう形で弊職務、氏名を含めた記事掲載は幾度かあったが個人のアクティビティに

ついて取上げられたのは初めてのことで。それがちょうど誕生日と重なり嬉しいプレゼントとなりました。



心身が許すなら遊行期入る歳（70歳）に短歌と写真短歌で構成する『続・続 私的アンソロジー』しあわせの構図「短歌・写真短歌篇」の発刊ができたなら良いなど夢想しています。

▼2018年7月7日：自費出版物の公的機関（図書館など）への寄贈

最近、歌集、句集、自分史などの自費出版物やその情報を目にする機会が多くなっている。しかし

それらを世の中へ公開、告知するツールも多くなはなく自費出版物のデジタルブック化やその公開、告知も限定的のように思える。

その背景には下記のような日本の現状があるようだ。

「幸福度世界3位のアイスランドでは10人に1人が自叙伝（自分史）を書くそうです。本屋さん

には一般の人が書いた自叙伝が平積みになっていてか・・・因みに、日本は51位（先進国で最

下位）です。」

図書館などの公的機関のサポート体制も然りで、寄贈や受入れ冊子等の紹介も積極的に紹介しているようには思えない。当方も自費出版をして初めて図書館への問い合わせを試みて寄贈のしくみが用意されていることを知り、弊冊子（続私的アンソロジー）しあわせの構図」の寄贈をしたところ。

因みに、60歳の折に上梓したDVD版「私的アンソロジー」は自分史の一種と考えて見つけ出した「日本自分史センター」に問合せして寄贈した経験がある。今回の冊子の寄贈を思い立ち調べてみて図書館も寄贈を求めていることが分かったがそれを積極的に広報しているようには見られないと

いう印象を持った。今回の寄贈（県立図書館、市立図書館、日本自分史センター）、納本（国会図書館）を通じて得られた収獲として「図書館の貸出し蔵書の検索で自分が寄贈した冊子名を入力してみるとしっかりと記載がされていて貸出しが可能になっていたことを見つけ小さな喜びを味わうことができた」ことを挙げたい。もっと多くの方々が自費出版に興味を持ちこの世界が広がることを願いたい。

▼2018年5月10日：「内陸に及ぶ津波、東北」の公表が延期されていた！

国の地震調査研究推進本部（地震本部）が太平洋沿岸に襲来する危険のある大津波が東北地方の内陸まで到達するとの長期評価を3月11日の2日前に公表する予定だったという。元原子力規制委員（島崎氏）が東電の旧経営陣3人の第11回公判で証言。公表延期は地震本部事務局から自治体と電力会社に事前説明をしたので4月に延期したいとの連絡があり結果的に了承したという。（地震が起こり）「本来なら何人が助かった・・・」と自身を責めたという。

組織が関わる限りこのような事実はこの世界でも日常に発生していると云えるが・・・しかし、国、行政に携わる人は大方責任を取らないことが当たり前になっているが事の影響

の大きさと関係当事者には大きな責任があるはずだ。

▼2018年5月6日：高齢者免許返納 メディア(特にTV)の喧伝では？

「高齢者免許返納で地方の社会 崩壊？」というシンクタンクが政策見直し提言という小さい記事を見つけた。

高齢ドライバーに一律に運転免許自主返納を求める政策を見直し、都市部以外では免許継続を支援すべきだ」という提言をシンクタンク「北近畿地域連絡会議」が提言したという。その中には次のようなデータがありTVの喧伝には制度への忬度を感じてしまう。

交通事故総合分析センターデータでは2015年の免許人口1万人当たりの事故は65歳以上の高齢層58・8件で25歳～64歳の壮年層で56・7件と大差なく16歳～24歳の127・1件よりかなり少ないと指摘。当方は政策が出された後次のように詠んだ。

生活の脚の手立てを置き去りに免許返上ひとり歩きす

▼2018年3月10日：地方紙の特集 東日本大震災7年

震災7年という節目からか地方紙の一面を使って特集が組まれその見出しは次のように構成されていた。

①福島第1原発2号機 原子炉格納容器内部調査(イメージ)

②トリチウム水の扱いが課題に(2018年2月22日現在)

③各号機の状況、廃炉までの工程

④ようやく廃炉の足掛かり

⑤原発事故後、被災地の介護体制崩壊
特に気になった点を以下に紹介する。

②…タンク貯蔵水約105万トン、うちトリチウム処理水(*)85万トン、貯蔵容量約110万トン。

*20万トンがトリチウムを含まないということか?また、今後貯蔵が可能な空き容量が5万トンという計算になる。トリチウムの処理技術が世界で確立されていないことには触れておらず課題とする中味が読者には示されていない。

③④…廃炉までの工程は偏に①のトリチウムの処理の可否及び溶融デブリの除去に掛かっておりこれらの課題が解決しないと③の行程はまさに「絵に描いた餅」となる。

⑤…三重苦(被爆、帰還困難、施設不足)に苦しむ高齢被災者の介護体制の崩壊はこの国の厳しい将来像を示していると思う。

▼2018年2月10日：地方紙のコラム記事「こんにち話」 チェルノブイリ原発事故で調査 子供の臓器に影響

かつてこのコラムでも福島原発事故の子供たちの甲状腺が

んの調査に対する政府、県、メディアの対応について特に数値の扱い（特に母数）の誤りについて述べた。例えば2014.05.20 再び数字の扱いについて（福島原発による子供の甲状腺がん調査）で詳述。

今回の掲載記事はベラルーシのゴメリ医大の学長だった時代のチェルノブイリ原発事故調査を基に「汚染地区に住むこと、そこで栽培された農作物の購入はいけない」と講演し国会で報告して99年に刑務所に6年間収監され、後にフランスに移住しEUの支援の下イワンキフに研究センターを設立したユーリ・バンダジェフスキー氏への取材記事（共同通信社）。政府（為政者）は如何に安全性について隠蔽しようとしたかの実際が述べられているがわが国でも上記のように政府、県、メディアの対応に類似性が見られる。個と組織の間に横たわる「深い溝（乖離）」は世界共通であることが判る。

旧ソ連の憲法には「市民には健康保護の権利を持つ」という条文があったとのこと。日本国憲法でも同じ様な条文があり健康被害がでていてそれを隠しているなら憲法違反となるのではと言及。

だから、健康被害は無いと必死にデータの分析・評価でごまかしていると見られても仕方が無いと言える。

▼2018年1月16日 福島県 セシウム濃度検査結果が発表されたが・・・

第1原発事故後、県が沿岸海域で実施している魚介類の放

射セシウム濃度検査で2017年に採取した全ての検体が国の基準値を下回ったという記事。2016年に続いて2度目とある。結果操業自粛する海域も第1原発の半径20キロ圏内から10キロ圏内に縮小しようだ。

減少するのは望ましいことだが放出されている汚染水から除去出来ないトリチウムについて言及がなされないのは正直メディアの認識の甘さを禁じ得ない。

汚染水からトリチウムを除去出来る技術が今の世界に無いという現実を取上げ今後計画されている希釈しての放出すればセシウム以上の危険性を孕むことに言及できないことを、メディアの問題としてかつてこのコラムで何度も取上げているが今回も海洋汚染の改善にのみ言及する姿勢は問題だと思う。

▼2018年1月11日：宮本輝の「約束の冬」を読む

宮本の著作としては平成15年発行の作品を図書館より借りて読んだ。下巻にあった
成程！と感じた文章を記す。

「不運な人も、幸運な人も、それを『運』ていうひとこととで片づけたりするけど、その運は、なにか人智でははかりしれんもんが分配したんやない・・・。やっぱり、その人が作り出したんやって思うねん。上原桂二郎が人に恵まれているという星のもとにあるのは、上原桂二郎

という人間の為せる業わざやねん・・・」

この著作で「雪迎え」に関する表現があり、発表後にその表現についてトラブルが生じて宮本がその誤りを認めて修正することを発表した記事を読んだことを覚えていた。

その折は著書を読む機会を逸していたが漸く機会を得た。雪迎えについては調べたりして覚えてたての短歌に次のように詠んだことがあるがどう推敲しても作品にならずそのままになっている。

冬浅し先人詠みし雪迎えこさき庭に我眼を凝らす

▼2017年12月26日：インスタ映え

地方紙のコラムのページの「時鐘」というコーナーに「インスタ映え」という記載記事があった。昨今「いいね」を求めてお金が動くのも当たり前のようだ。

フェイクニュース、ポストトランス・・・他者に認めてほしい欲求は政治家の奢りや劣化を助長し付度が蔓延りそれを追求しても解決出来ない今の政治には明るい先行きは期待できない。

短歌の世界に「社会詠」というジャンルがあり当方の稚拙な詠草から拾い出してみた。

・うつし世の虚栄の極みやフォロアーが売り買いされるインスタグラム

・今の世はフェイクニュースが飛び交ひて真贋見極む眼望

まん

・この時代ポスト・トゥルースと言われても昭和生まれはついでに行けぬ

この記事はオバマ大統領の離任演説から「民主主義はあなたたちを必要としている」を元氣の出る言葉として締めくくっているが・・・。

▼2017年11月25日：冊子「続私的アンソロジー」しあわせの構図」を発行

60歳で「【林住期】への羅針盤」として上梓した「D VD私的アンソロジー」に 続く形で、今般（11月）70歳を契機に「【遊行期】への羅針盤」と位置付け「続私的アンソロジー」しあわせの構図」を発行することとなりました。

いわゆる自分史の範疇ともいえませんが山形にUターンした以降の「マイプロジェクト」「写真」「短歌」「写真短歌」「HP掲載のコラム「飛耳長目」」「年譜」などで構成しております。

なお、「発行に寄せて」には社会に出てからこれまで約半世紀の様々なシーンでお付き合いとご指導

を賜った方々7名の方々から内容の未熟さを補って余りある言葉を頂戴しております。

ここに改めて謝意を表します。